本当に無限な無限航路

曙　寛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
本当に無限な無限航路

【Ｎコード】
Ｎ０７４２ＢＡ

【作者名】
曙　寛

【あらすじ】
無限航路の二次小説です。ユーリへの憑依ではなく、一人の人間として生きていきます。
Ｒ１５は念の為つけています。
神に殺された一人の青年は新しい世界で何を思い、何を成すのか。

プロローグ　始まり（前書き）

はじめての二次小説ですが、がんばります。

プロローグ　始まり

ここは・・・どこだ？

「ここに名はない。」

誰だ？あんたは？俺はどうなったんだ？

「ワシは、お前らの言う神だ。」

！そうでしたか。神様。失礼しました。

「よいよい。わしのミスでお前は死んでしまったのだからな。」

神でも失敗するのですね。何故俺をここに呼んだのですか？

「怒らんのか？」

あまり未練はないので。ところで、死んだのなら早く天国でも地獄でも送ればいいのでは？

「いや、お前は謝罪を込めて生まれ変われさせてやろう。行きたい

世界はあるか？」

では・・・創作の世界なのですが、『無限航路』の世界にしていただきませんか？

「よかろう。お前は良い人間だったようだな。特別に何か欲しいものはあるか？３つやろう。」

ありがとうございます。では、１つ目は、俺に知識をくれませんか？艦船を設計できるほどの。
それ以外は神が決めていただいてかまいません。

「わかった。転生でよいのだな？　では、お前は無限航路に限りなく近い世界に行くことになる。前世の知識も役に立つだろう。」

はい。では行ってまいります。

「お前は１７歳のジン・ストラードという青年となり、ラッツィオという星に生まれることになる。時期は原作開始の三ヶ月前。では、いくぞ！！！」

そして俺は意識を失った。

俺、ジン・ストラードは、カプセルのようなベッドの上で目が覚めた。

「ここは…？」

俺はとりあえず外に出た。家のポストには、ストラードと書いてあり、自分の家であることが分かった。外観はゲームに出てきたカリオの家のような感じだったが、俺は宇宙（そら）に出る気なので、短いつきあいである。俺は町を見るため、町に向かった。

町に向かうと、店先に服を並べていた人が声をかけてきた。

「よう！あんたが引っ越してきた奴か！？」

どうやら俺は引っ越してきたことになっているらしい。よく分からないので、「そうです。ジン・ストラードといいます。」というと、彼はニカッと笑って、

「ジン、か。俺はシッカス。よろしくな！」

「ああ。よろしくな。ところで、今度町を案内してくれないか？早くここの地理を把握したいんだ。」

「いいぜ。明日は休みだから案内してやるよ。」

「ありがとう。」

その後俺は家に帰った。町で迷ったら大変だし、案内もあるので焦る必要は無いからだ。

「さて。今の状況を把握しようか。」

家の机には、クレジッタと、衣服、それと本が置いてあった。

ジンへ
この紙にはこの世界の説明などが書いてある。よく読んで新しい生活に役立てて欲しい。これがお前への恐らく最後の手伝いだ。
どうやらこの本は神様がくれた物のようだ。恐らくというところが心配だが、気にしなくていいだろう。
そうして俺は本を読み始めた。そこそこ分厚いが、何もすることが無いのでかまわない。

やっと全部読み終わった。５００ページほどあったので、結構時間が掛かってしまった。
書いてあったことを纏めると、

この家は中央街（酒場とか軌道エレベーターがあるところ）から２キロほど離れたところにあること。
クレジッタには７００００Ｇ（ガット）はいっており、生活必需品はすでにあること。
この世界には、和服などの前世の文化が生きていること。
俺以外の転生者は送らないこと。
参考として、アルク級の設計図が本に挟まっていること。
などなど・・・

など、数多くの役立つ知識が書いてあった。

俺以外の転生者って・・・神様はよくミスで人を殺しているのだろうか？
ふと外をみると、もう暗くなっていた。俺は明日に備え、寝ようと思い、ベッドに行った。
カプセル型のベットに入るのには勇気がいるが、いざ入ってみると、とてもフカフカで気持ちよかったので、すぐに寝てしまった。

プロローグ　始まり（後書き）

ＱＯＬさんや０シュウト０さんの小説を読んで自分も書きたくなりました。
無限航路のファンが増えてくれればうれしいです。

第二話　原作キャラと出会う（前書き）

批判、感想待っています

第二話　原作キャラと出会う

現在時刻、午前8時。俺はカプセル型ベットの中で目が覚めた。しかしどうやってカプセルから出るのか分からない。つまり緊急事態。カプセルから出なければ食事ができない。ぐっすり寝て腹も減っている。カプセルは固定されていそうで、中にもボタンらしき物はない。

「やばい、腹減った。このままでは・・・」

5分程考え、俺は自棄（やけ）になってカプセルのふたを思いっきり押した。ふたは何事も無かったかのように、バタンレス構造なのか、ゆっくり開いた。

「・・・」

心の底から誰もいないことを喜んだ。今俺の顔はトマトのように紅く染まっているだろう。
俺は気を取り直して、顔を洗うために洗面所に行った。

「え・・・」

洗面所で鏡を見た瞬間、固まった。
顔が紅かったからではなく、鏡に映ってる自分の顔が、前世とは比べ物にならないくらい、かっこよかったからである（といってもユーリと同じか少し上ぐらいだが）。黒い髪に黒い目、そして日本人のような肌の色をしている。

俺は焦った。まさか神様がこんなところに願いを使ったのではないかと思ったからだ。俺は急いで机に向かった。本には、願いについては今忙しいから後日知らせると書いてあったためだ。
机の上を見ると、メモが置いてある。それを手に取ると、願いについての事が書かれていた。

ジンへ
願いについてじゃが、一つは、身体能力の向上にした。何をするにも体力は必要じゃからの。
二つ目は・・・わしには決められん。やはりお前が決めてくれ。
あと、ベッドの近くにエピタフを置いておいた。その方が色々出来るだろうからな。
神より
注：顔についてはサービスじゃ、他の神に怒られてしまったがのぉ。
フォッフォッフォッ。

何かとお茶目な神様である。そんなことするから俺を殺してしまったのではないのか？と疑問に思ったが、顔は良くても損はしないのでありがたくもらっておこう。
エピタフって、俺にどうしろと？
とりあえず、今日はシッカスに町を案内してもらう日だ。俺は冷蔵庫に入っていたパンモロという動物の肉を食べる。パンモロって名前誰がつけたのだろう。前世でも気になっていたことだが、この際どうでもいい。家に置いていても意味がないので、エピタフはユーリのように腰に紐で結び、見えないように服で隠した。

午前9時。

俺は町に出て、昨日行った店に行くと、すでにシッカスは待っていた。

「ごめん。またせた？」
「いいや。元はと言えば昨日集合時間を言ってなかった俺が悪い。じゃあ何処から行く？」
「シッカスの思う順番でいいよ。俺は町のこと何も知らないから」
「わかった。じゃあ・・・」

そうしてシッカスの案内は始まった。
シッカスの案内はとても分かりやすく、俺はすぐに理解できた。銀行、商店街、山、道路、そして今、俺たちは軌道エレベーターに入った。

「――――つまり、この軌道エレベーターが俺たちの生活を支えているんだ。よし、じゃあ次はこの施設の中にある、ＯＧドックの憩いの場、酒場に行くぞ！あそこには綺麗な看板娘がいるんだ。お前も絶対惚れるぞ？」

！！それってもしかしたらティータじゃないのか？まぁ確かにいても可笑しくは無いが・・・
シッカスは意気揚々と酒場に入っていく。俺はあれやこれやと考えながら付いていった。

「ああ！シッカスじゃないかい！そこの子は誰だい？」
「よう。ばあさん。こいつは昨日引っ越してきたジンって奴だ。案内を頼まれたんだ。」
「こ、こんにちは。ジンです。宜しくお願いします」
「ああ。私はロズリン。こっちは看板娘のティータ」
「ジン、ね。よろしく」

「こちらこそ」

うーん。ついつい原作キャラとあって緊張してしまったよ。しかしゲームでみたとおり、かわいかった。惚れるほどではなかったが。

「んじゃあ、今日は挨拶に着ただけだ。じゃあなばあさん」

「また来ておくれよ！！」

俺たちは酒場を出ると、早速シッカスが「惚れただろ？」と言ってきた。俺は惚れてない、と返し、次の場所へと向かった。

「全く、素直じゃねぇな。・・・次は空間通商管理局だ。知っているかもしれないが、ここはあらゆる国家から独立した組織で、人類の死生を握る施設であることから、禁忌不可侵の存在だ」

「それについては知ってる。あとステーションにはヘルプGというものがあるのは知っているんだが、それ以外は無いのか？」

ゲームでは宇宙港の他の施設はヘルプGと造船工廠くらいしかなかった。現実ならば他の施設もあるだろうと思ったのだが、

「ここには造船工廠がある。ほら、そこで今フランコ級の造船してるだろ。宇宙港の説明は担当のドロイドのほうに頼めばいい。これで俺の案内はここで終わりだ。俺は店か酒場にいるから用があったらきてくれ。じゃあな」

「分かった。ありがとな」

エレベーターを降りて、俺たちは別れた。俺はこれから、案内途中に見つけた日本風の店に行った。

少し見つけにくいところにその店はあり、中に入ると、退屈そうだ

った店主が起きて、話しかけてきた。

「初めての方ですね？ここは独特な文化の品があります。ご説明いたしましょうか？」

「いや、いいです。わかりますから」

店は珍しい木造で、壁に商品が立てかけてある。

店長には何故か熱心に武者鎧を薦められたが、俺は黒地に紺の線が入っている袴（はかま）のような空間服と、日本刀のようなスークリフ・ブレードを購入した。

さらに、他の店で携帯端末とノートパソコン、さらに上着を何着か買い、家に帰った。

俺は家に帰ると、袴と刀をクローゼットに閉まい、今日はもう寝ることにした。ここにユーリたちが来るまで約三ヶ月ある。それまでに宇宙に出る準備は出来るだろう。

第三話　初めての星間移動（前書き）

話の切り時が見つからず、かなり長くなってしまった・・・

第三話　初めての星間移動

朝、俺はカプセルから起きて、神様から貰った設計図と能力で、艦船の設計をしてみることにした。
机の上にアルク級の設計図を広げ、しばらく眺める。すると、能力のおかげですぐ構造を理解できた。
パソコンについている機能で、設計図をコピーし、片方の設計図に自分なりの改造を加えてみた。

（うん？ここに装甲版を足したほうがいいんじゃないのか？これなら費用もかからないし・・・ヤバイ、設計するの楽しすぎる）

（ふぅ。こんなものか。もう昼か。ついつい楽しくて夢中になってしまった）

俺は設計図を弄（いじ）るのをやめ、昼ご飯を食べて、出かけることにした。

俺は、町の人に艦船設計社がないか尋ねてみたが、原作どうりこの星にはないようだ。
なら俺は、設計社がある星に行けばいいじゃないか！と思い、軌道エレベーターから宇宙港に向かった。

宇宙港には、ドック以外にも空港のようなカウンターがあり、人間そっくりなドロイドが管理している。

「はい、お客様。どのような用件でしょうか？」

「このあたりで艦船設計社がある星はどこですか？また、その星にいく便はありますか？」

「はい。惑星ポポスに小型艦船の設計社があります。他にはラッツィオ軍基地がありますが、軍所属の船しか入れないので、この宙域にはポポスにしかありません。今から４時間後にポポス行きの便が出航しますので、予約いたしますか？」

「予約する。いくらだ？」

「５００Ｇです。ポポスへは１３時間ほどで到着する予定です。それまではご自由にしてもらって結構です。出航時刻に遅れないように注意してください。」

（うん？ポポスにあったっけ？まぁいいか）

俺は宇宙港から降りて、酒場に行ってみることにした。

酒場に着くと、俺に気づいたロズリンが大きな声で、「やあ！！ジンじゃあないかい！」と言ったので、酒場にいた人達が何事かと一斉にこっちを見た。

俺は恥ずかしかったが、ふとあることに気がついた。ティータとシッカスがいないのだ。

シッカスは服屋の店員だからいないのは分かるが、ティータはこの酒場で働いているから、いつもいる筈だ。

「ロズリンさん。ティータさんがいませんが、休みですか？」

「ああ。ティータは体調が悪いから、休ませたんだ。・・・気になるのかい？」

「・・・看板娘がいなけぇりゃ誰でも気づきますよ。酒場に来たのは昼ごはんを食べるためです。」

そう言うと、隣の席でサラダを食べていた男が驚き、「ティータちゃんいなかったのか！？」と騒ぎ出した。お前、気づいてなかったのか・・・

「ロズリンさん。水とパンモロのステーキをください」

「あいよ。ちょっと待ってな」

ロズリンさんが、肉を焼き始めた時、隣の男が話しかけてきた。

「アンタ、変わった格好してるな。ＯＧドックか？」

「いいえ、違いますよ。この服は昨日変わった店で買った空間服です。」

「へぇ、そうなのか。でも寒くないのか？これから冬だぞ？」

「えっ？・・・だ、大丈夫です。帰りに上着を買うので。」

「ん？そうか。ここはいいよな。看板娘はかわいく、料理も上手い！」

「（いないからってよくそんな大声で言えるな）そうですね。私は引っ越してきたばかりなのですが、ここの酒場はいいです。ところで、この宙域には海賊はいますか？」

「海賊？アンタそんなことも知らずに引っ越してきたのか！？ここエルメッツァはスカーバレル海賊団って言う奴らが沢山いる。軍も海賊とグルになってるのか、野放しになってるんだ」

「そうですか・・・私はこの後ポポスに行くので、何もないことを願いますよ」

目の前にステーキが置かれた。俺はそれを食べて酒場を出た。美味しかった。

俺はポポスに行く準備をするため、一度家に帰った。

（設計図と、クレジッタと・・・後は上着くらいか。）
家で腰に刀を差し、鞄に設計図とクレジッタと上着をを持って、家を出た。

宇宙港に行き、カウンターでチェックを済ませ、搭乗口に向かった。が、刀は預かられてしまった。
船は、５０メートルほどで、小型のバクゥ級のような感じだった。奥には護衛のジュノー級が停まっている。しかしあんな船１隻でスカーバレルを撃退できるとは思えない。

「では、定期便１３０８、出航いたします」

船はラッツィオから、ポポスに向けて出発した。船の中は飛行機のようで、窓からみえる宇宙が綺麗だった。

『皆様。もうすぐポポスに到着いたします。船を降りる準備を始めてください。またのご利用をお待ちしております』

艦内放送が流れ、俺は準備を始めた。どうやら、海賊には出会わなかったようだ。俺は船から降りて、刀を受取りって、ドロイドに艦

船設計社とモジュール設計社への道を教えてもらってから、地上に降りた。

時刻は午後５時頃。俺は夕日を浴びながら、モジュール設計社にいき、モジュールの設計図を買った。
モジュールの設計図には、当然ゲームと違って奥行きがあるので、なかなか面白かった。
次に俺は艦船設計社に行った。どうやら、民間の安い小型艦などを扱っているようだ。

「初めてのお方ですね？どのような船を所望しておられますか？我が社では、お客様のニーズにあわせて、幅広く設計図を取り扱っております。用がありましたらお呼びくださいませ」

設計社にはフランコ級、ジャンゴ級、サウザーン級、乗って来た小型艦など、原作では作れなかった船の設計図が売っていた。何故この設計社にユーリたちが来なかったのかは謎だ。

「設計図はこれだけですか？」
「はい。我が社にあるのはこれだけです」
「では、フランコ級と、ジャンゴ級の設計図をください」
「かしこまりました。二つで４８０Ｇです」
「・・・ところで、このアルク級の設計図を見てくれませんか？」

そういって俺は自分で改造を施した設計図を渡した。

「こ、これは・・・！これは誰が改良を！？」
「え？い、いや、私ですが・・・？」
「ッ！あなた様でしたか！！これは良い改良です！」

「は、はぁ。ありがとうございます」
「わ、わが社の他の船も改造していただきませんか？代金は払いますので！」
「・・・（コイツ、急に態度変えたな。俺を利用しようとしているのか？気に食わないな。）いえ、やめておきます」
「・・・残念です。またのご利用をお待ちしています」
俺は設計図を受取って、建物から出ようとしたとき、うしろから「チッ・・・」と舌打ちの音が聞こえた・・・

（あの設計社、嫌いだな。急に手のひら返してきて・・・）
俺は宇宙港で、帰りの便の予約をしてから、情報収集をするために酒場に行ってみた。しかし、情報はラッツィオとあまり変わらなかったので、酒場で水をチビチビ飲んで、帰りの便までの時間を潰した。
俺は便に乗って、ラッツィオに帰った。帰りも海賊に襲われなかったので、そこまで海賊いないんじゃないか？と思っていた。
後から聞いた話だが、定期便は空間通商管理局の船であること、それと襲ってもあまり奪える物がないことから、見つけても見逃すらしい。
酒場に行くと、ティータとロズリンが迎えてくれた。

「やぁ！また来てくれたね！」
「あ！ジン！心配してくれてありがとう。でももう大丈夫だからね」
「ん、そりゃ良かった。ロズリンさん、水をくださいませんか？」
「あいよ。アンタは水が好きだねぇ」

俺は酒場で適当に情報収集をしていると、いつの間にか外が真っ暗になっていた。

「あ、もうこんな時間か。では俺は帰りますねー」
「アンタ、酒場は夜からが楽しいんだよ？」
「そうかもしれませんが、ロズリンさん、寝不足はお肌の天敵ですよ？」

俺はそう言って酒場から出た。造船は改良を加えてからでいいだろう。
俺の家は町から少し離れているので、帰り道は徐々に街灯が少なくなっていく。そして、街灯がかなり少なくなりってきたところを通っていると、裏路地の方から話し声が聞こえた。

「――だから、嬢ちゃんは俺たちと少し遊んでくれればいいんだよ」
「そうだぜ？やってみると楽しいぜ？」
「い、いや・・・」
「なぁ、もうやっていいかぁ？」
「ッ！！！こ、こないで・・・」

すると、刃物で布を裂くような音が鳴り、続いて布が擦れるような音が聞こえた。俺は急いで音が聞こえた裏路地に入っていった。

私は、夜中の道を歩いていた。もう慣れていたし、これまで何もなかったので、ここは治安がいいのだろうと思っていた。
前に大柄の男が三人たむろしていた。私は少し離れて通り抜けようとしたとき、声をかけられた。

「よう嬢ちゃん。何でこんなとこうろついてんだ？」
「危ないぜ？」
「今は仕事の帰りですけど？あなたたちは誰？」
「用事がないなら、俺たちと遊ばない？」
「い、いえ遠慮しておきます」

そう言って私は歩こうとした。だが、もう囲まれていた。抜け道は無いかと探すと、男の横に裏路地があった。逃げ道はあそこしかない。

「何でだよ、別にいいじゃねぇか。ちょっとぐらい。って、おい！」

私は裏路地に逃げ込んだ。しかし———

（行き止まり！？）

振り向くと、すでに男たちが出口をふさいでいる。

「おいおい嬢ちゃん。急に走り出すなんて酷いぜ」

「わ、私に何する、つもり・・・？」

自分でも声が震えているのがわかった。男たちは少しづつ近づいて来る。

「はぁ。だから、嬢ちゃんは俺たちと少し遊んでくれればいいんだよ」

「そうだぜ？やってみると楽しいぜ？」

「い、いや・・・」

「なぁ、もうやっていいかぁ？」

何を、とは言わないが、もうわかっている。

「ッ！！こ、こないで・・・」

私には男三人を倒すほど力がない。つまり抵抗しても無駄ということだ。

リーダーの男が私の胸ぐらを掴み、ナイフで服を破った。

「ッ！！！！」

さらに、スカートも脱がされる。私は涙をこらえるのに必死だった。

何かに集中すれば、この悲しみを忘れられるかも知れない。この苦しみから逃れられるかもしれない。

そう思って必死だった。

（誰か助けて・・・！！！）

そう思ったとき、男たちとは違う声が響いた。

俺は急いで裏路地の前に行き、中を覗くと、三人で女の子にたかっていた。

「おい！！お前ら！何してんだ！！」

薄暗くて見えないが、男たちが振り向いたことはわかった。襲う途中だった男たちの一人が歩いてきて、

「おい兄ちゃん。今だったら見逃してやるぜ？ここで見たことは全て忘れて、ママのところに帰ん――ー」

「黙れ！！」

「ぐはッ！！！！！」

俺は問答無用で男を殴った。男は殴り倒され、壁にもたれかかった。

「ったく。三人で寄ってたかって女の子に何してんだ？お前ら？」

「てめぇ！！その顔ぶっ潰してやる！！」

残りの男たちがナイフを構えながら走ってきた。

（これなら刀はいらないかな？）

俺は冷静に、ナイフで突いてきた一人目の男をかわし、すれ違いざまに鳩尾（みぞおち）を殴る。

男は「ぐ・・・！！」と呻きながら倒れた。

さらにもう一人の男が叫びながら突っ込んできた。そのナイフを持っている手を取り、引く。すると男の腕が伸びきったところを肘に肘打ちを打ち込んだ。

「がぁぁぁぁぁぁ！！！」

男の肘はありえない方向に曲がり、痛みで苦しんでいる。俺はそいつのこめかみを殴って気絶させた。

ふと女の子の方を見ると、あられもない格好で震えていた。俺は彼女を安心させるために歩み寄ろうとすると、

「い、いや！こないで・・・！」

・・・怖がられてしまった。だが、安心させなければ話が進まない。

「大丈夫だ。俺はお前に何もしない。が、まず服を着てくれ。・・・上の服は破られてるのか？じゃあこの上着を着てくれ。俺は裏路地の出口でクズ共の処理してるから」

「・・・何もしないの？」

「あぁ。しないよ。・・・こいつら重いな」

「う、うん。助けてくれて、ありがとう」

俺は裏路地から出て、クズたちをゴミ箱に入れ、入るぞ、と言ってから裏路地に戻った。

裏路地に入ると、上着を羽織（はお）った女の子がいた。気づかなかったが、今はわかる。こげ茶色の髪をポニーテールにし、目は赤銅のような色だった。

「あ、あの、助けていただいてありがとうございます！えーと、何かお礼でも！」

「あぁ、いいよ。お礼なんて。当然の事をしただから」
「え？じ、じゃあお名前だけでも！私はミーシャ。ミーシャ・エンシェントです」
「エンシェントさんか。俺はジン・ストラードだ。じゃあな。帰り道気をつけろよー」
俺はそのまま家に帰ろうとしたが、ミーシャさんに引き止められてしまった。

「え！？ちょっとジンさん！？待ってください！」
「ん？何だ？上着は返さなくていいぞ。家に予備があるから」
「そういうことじゃなくて！・・・あ、あの、不安なので、送って・・・もらえませんか？」
「あ、そういうことな。別にいいが、お前の家って遠いのか？」
「はい、すこし離れたところにあります」
「じゃあ行こうか」

こうして俺はミーシャさんを送ることになったのだが、帰り道の方向が同じだったので、特に問題はなかった。

（え、方向全く同じなんだが・・・この子どこまで一緒なの？）
「ねぇ、ジンさんは何でそんな変わった格好してるの？」
「え！いや、これは民族衣装みたいなもんだ。俺はその民族じゃあないがな」
「ふーん。ところで、なんでその剣使わなかったの？それ使った方がいいんじゃない？」
「女の子の前で殺し合いするわけにもいかないし、それにアイツら

なら刀無しでも大丈夫だと思ったから。後、お前の家ってまだなのか？」
「もうすぐ私の家だよ。・・・あ、ほら、あの家だよ！！」
「（え！？俺の家の６件隣じゃん！！）お、良かったな。ここまでくればもう大丈夫だろ？」
「うん。・・・ところで、ジンさんは何処に住んでるの？」
聞かれてしまった。しょうがないので、「・・・お前の家の６件隣だ」と言うと、
「え！！そんなに近所だったの！？」
と驚かれた。
「そういうことだ。じゃあなー」
「うん。ありがとね、ジンさん！！」
俺は少し歩いて、家に入った。
（・・・あの子があんなに近所だったとは、意外だ）
俺は着ていた物を脱ぎ、カプセルに入った。疲れていたので、すぐに睡魔がやって来た。
（船の改良は明日やればいいだろ・・・）

第三話　初めての星間移動（後書き）

ヒロイン、ミーシャさんの登場です。

というか、エクシード航法（光速の２００倍）の計算を適当にしてみたら、ラッツィオからポポスまでの航海時間が１秒かからないんですが・・・ｗｗｗ

間違ってる可能性もありますが。

第四話　造船

ミーシャさんという女の子を助けてから４日経った。俺はそのあいだ、前に買ったフランコ級とジャンゴ級の設計図を弄っていた。

（ん？ここの回路、こうした方がよくないか？・・・おう！これでジャンゴ級の艦首についている武器が両方とも使えるようになった！よし、次はフランコ級の耐久と武装搭載数の改良を・・・）

といった感じで、４日間ずっと家に引き篭もっていました。

そして、今日はついに、改良が終わった船を作りに行くのだ！！
何と、フランコ級、ジャンゴ級のどちらも改良を重ね、フランコ級は、大体ガラーナ級くらいに、ジャンゴ級は、ディゴウ級レベルまで性能を上げることに成功した！！
本物と比べてないが、そこらの海賊船よりは強いことは確実だ。
ちなみに、フランコ級とジャンゴ級にしたのは、デザインが好きなことと、乗員数が少なく、艦船初心者でも扱えそうだったからだ。
俺は意気揚々と、家を出て、宇宙港へ向かった。

宇宙港にある造船工廠。ここで船を作り、隣の改装工廠でモジュールを入れる。
造船過程が見れるのは、なかなかいいものだ。

造船工廠の受付に行き、ドロイドに話しかけた。

「あの、この船を作りたいんですが・・・」

「はい。この設計図の船ですね？・・・しかしこれは設計図を改造してありますので、新規艦船として金額が高くなります。よろしいですか？」

なるほど、改造艦は費用が高くなるのか。名称はどうしようか？

「はい。それでいいです。ではフランコ級をベレッタ、ジャンゴ級をウォッカにしてください」

「わかりました。フランコ改級が５４００Ｇ、ジャンゴ改級を６３００Ｇで、合計１１７００Ｇです」

「では、このクレジッタで」

「はい。・・・・・・・・では、船が出来るまで時間がありますので、それまではご自由にお過ごしください」

「はい、わかりました」

それから俺は2時間ほど造船の経過を眺め、ご飯を食べに酒場に行った。

酒場に入ってすぐ、俺は方向転換をして、立ち去ろうとしたが、誰かに服を掴まれてしまった。

「え、えー・・・マタ、アナタデスカ？」

「何でジンさんは私を見た瞬間帰ろうとしたのかなー？」

「い、いや、造船中の船を見に行こうと・・・」

「まぁまぁいいから入って」
（しかたない・・・）
そう、彼女、この前助けたミーシャさんだ。あれ以降何かと俺に絡んでくる。
「で、何であなたはそんなに俺に絡むんですか？」
「そりゃ命の恩人だから。ジンさんといると楽しいから！お礼もしたいし！」
「だから、礼はいらないって」
「それでも私はジンさんにお礼をしたいの！」
何でそこまでこだわるのか・・・俺にはわからない。
「なんだいジン？その子と知り合いかい？」
「え？ああ、少し前に不良に絡まれてるのを助けただけですよ」
サラッと言うと、ティータは言った。
「助けてもらえてよかったね、ミーシャちゃん。ジンさんはすごいね」
「うん。だからお礼をあげたいんだけど・・・」
「すごい事か？あとお礼はいらないよ」
「ジンさんはすごいよ。今時不良に絡まれていてもみんな知らんぷりだもん」
「あと、ジンさんは強いしね。」
「そうか。だがジンさんはやめろ。ジンでいいよ」
「恩人を呼び捨てには出来ないよ！！」
「はぁ・・・」

ため息をつくと、ロズリンさんが注文を聞いてきた。

「まぁ、それくらいにしな。ジン、あんたはステーキだろ？」

「ん？ああ、ステーキをください」

「さっき頼んだ客が酒で倒れたから、その人のがあるんだ。それでいいかい？」

「別にいいですよ。美味しいですし」

ステーキを食べながら、ティータとミーシャさんが話しかけてきた。

「ジンさんって、夢とかある？」

「夢？」

「そ。ミーシャは？」

「私は・・・まだ決めてない」

「俺は、宇宙を旅したい」

そういうと、ティータたちは驚いて、

「え！！それってＯＧドックになりたいってこと！？」

「何で！？」

「何でって・・・宇宙を旅したいからだけど？」

俺はステーキの最後の一切れを口に入れながら言った。

「ところで、ティータの夢は？」

「私は、この酒場を継ぐことかな。ロズリンさんにも恩返ししたいから」

「へえ。うれしいこと言ってくれるねぇ」

「そっか。じゃあロズリンさん。はい代金」

「あいよ。今から何処に行くんだい？用事がないならゆっくりして

いきな」
「いえ。これから造船工廠に行くので」
「何で？ジンさんは船を作るほどお金持ってないでしょ？」
・・・何でミーシャさんは俺が金を持ってないと断言できるんだ？
「夢なんだからそれくらい金持ってるよ！！ミーシャさんは俺のこと貧乏人だと思ってたのか！？」
「え？違うの？」
「え！じゃあ本当にジンさん船作ってるんだ。じゃあもうすぐこの星を出て行くの？」
ミーシャさんは気づいていないみたいだが、ティータは寂しそうに尋ねてくる。俺は、
「いや、しばらくこの宙域で海賊狩りでもするよ。それと、あえて言わなかったが、お前の方が年上だから、呼び捨てでいいよ」
「え！？そうなの！？まさかロズリンさん喋ったの！？ちょっと――――」
ティータが騒ぐのを無視して、宇宙港に戻った。

「お、もう結構出来てるじゃん」
宇宙港の造船工廠に入り、ドロイドに教えてもらったドックに入ると、フランコ級の形は出来ており、あと一時間もかからずに完成しそうだった。
ジャンゴ級の方も見たが、艦首の武装などが付いておらず、フラン

コ級の方が先に完成しそうだった。

のんびりとフランコ級の造船を眺めていた。２０分ほど経っただろうか。フランコ級は完成した。

『艦船製作の依頼をしていたストラード様。完成いたしましたので、ドックまでいらしてください。繰り返します――――――』

もういるんだが。俺はそう思いながら歩いていった。

俺は船を作り、船員募集を頼んでから、もう一度酒場に向かった。

「戻ってきたかい！じゃあ船は出来たのかい？」

「ええ。出来ましたよ。船員がいないので、まだ出航できませんが」

「アンタも今日からＯＧドックの一人だよ。がんばりな」

「はい。がんばります！」

「星の海か・・・私も見てみたいな・・・」

「ミーシャ！？宇宙は危ないよ！？海賊もいるし、すぐ外は真空だよ！？ミーシャがいったら死んじゃうよ！」

ティータに注意され、ミーシャさんは拗ねてしまった。

船員が集まるまで、俺は酒場でくつろぐ事にした。

のんびりしていると、ティータが俺の腰をみて、声をかけてきた。

「ねぇ、ジン。腰に何か付けてるの？」

「ん？ああ。これか？」

ティータが気づいたのは、腰に付けているエピタフ。俺は見せるか迷ったが、見せなくて怪しまれるのも嫌なので、見せることにした。

「いいけど、驚くなよ？」

「う、うん」

俺は腰からエピタフを外し、テーブルの上に置いた。ティータは最初、何これ？と言った感じで見ていたが、エピタフだと気づき――――

「えぇ！！これってまさか、エピタフじゃないのー！！！」

耳を劈(つんざ)くような叫んだ。

まわりはこちらを向き、こそこそと話をしている。

「おい！叫ぶなよ！！」

「ご、ごめん。でもまさかジンがそんな物持ってたなんて・・・」

「はぁ・・・」

エピタフ。それは手にする物は莫大な財を手に入れるとも、宇宙を統べる力を持つとも言われる、約１０センチ四方のキューブである。

（誰もこない。良かった。トーロみたいな奴がいなくて。酒場を荒らしたくないからな）

そして、俺は安堵した瞬間、

「おい兄ちゃん。おとなしくそれを渡しな」

サングラスをかけた男たちが偉そうにこちらに手を伸ばしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0742ba/

本当に無限な無限航路

2012年1月6日23時48分発行